

新型コロナウイルスと自然

川 眞 人



骨関節感染症の講演（平成30年・韓国にて）

雲

八幡宮と私の関係は先代の秋永勝彦様と私が笛を愛する同好の士という事で「雲八幡宮コンサート」に最初から参加して以来、最後のコンサートまで参加させて頂き、雲八幡宮の素晴らしい魅力、周囲の自然環境に関心を持ち、ほぼ毎年のように参拝するようになりました。この度の新型コロナウイルスが大変な猛威を振るい日本全国どこにも行けなくなってしまうという状況の中で何とかこのコロナウイルス退散を願って参拝したところ現宮司の秋永一憲様から雲八幡宮の神社報『かしわ手』に寄稿を求められましたので『新型コロナウイルスと自然』というテーマで一筆啓上させて頂きます。

今回の新型コロナウイルスのようなパンデミック（世界的大流行）は6世紀のローマ帝国時代から既にペスト菌が主体となつて何百年もの間、全世界を恐怖に陥れていました。このペストも北里柴三郎の抗血清療法や様々な化学療法が発達する事からほぼ終焉しました。今世紀では天然痘やスペイン風邪に見られるようなウイルス感染が主体となつてパンデミックが起こっています。

今回の新型コロナウイルスは2019年12月頃から中国の武漢市で発生したといわれ

川 眞 人（かわしま まひと）先生

昭和19年中津市に生まれ、昭和38年に県立中津北高等学校、昭和44年に東京医科大学医学部を卒業、医学博士修得。東京・九州と病院に勤め、昭和56年に川眞整形外科医院を創立、一代にして社会医療法人玄真堂 川眞整形外科病院に成長させる。学会及び社会における活動も多岐に亘り、特筆すべきは日本骨・関節感染症学会の創設者（現・名誉会員）である。市教育委員長、中津市医師会会長、中津ファビオラ看護学校長など多くの大役を歴任。大分県知事賞、日本整形外科学会功労賞など数々の大賞を受賞。著作は『骨・関節感染症の臨床』（1989年 西日本臨床医学研究所）他多数。

その後、急速に世界中に広がっていきました。6月25日現在の感染者は約930万人、死者約48万人というとてもない感染拡大が今なお続いています。特に欧米やブラジルなどでは途方もない死者が出ていますが、不思議にも日本は感染者も6月25日現在約1万8千人、死者約970

人と先進諸国の中では極めて少ない数字です。この事が何を意味するかが現在、盛んに議論されています。一つは日本人の清潔観念と生活スタイルが他人と直接

接触しない、良く手洗いや入浴をして体を清潔に保つなどの事が言われています。この事は幕末に黒船で日本に来たペリー提督が「日本人の清潔観念はアジアの諸国とはずば抜けて違つ」という記録を残しています。更に日本人の自然観、自然

に対する考え方が大きく影響しているのではないとも言われています。新型コロナウイルスは、明らかに人が集中している大都會が中心となつていて、自然の多い地方は発症が少ないという事が歴然としてい

ます。この事から密集した大都會で暮らす事のリスクの高さを指摘する人が増えてきました。日本総合研究所の漢谷浩介氏によると「日本国内で死亡した方の半数以上が1都3県に集中している。その首都圏の『密』のあり方がある一線を越えて極端になつていて。東京という狭い範囲に物凄い人間を見事に詰め込んでかろうじて生きる環境を造っている。この行き過ぎた環境が、この感染症を都會に集中させた」と言われています。人と人との間合いを取りながらマスクをして手をよく洗うという対処をしながら自然

中で暮らすの方がはるかに安全であると述べています。

この雲八幡宮の環境を顧るとその事を改めてつくづく感じさせられます。市町村合併後はますます大都會が中心になり、山や海に囲まれ自然に満ちた環境で暮らす人々がなくなっている現状を考えると直すいい機会ではないかと思ひます。

自然を愛し、自然の中で暮らす事の重要性を日本人に指摘しながら自らも日本の自然と共に暮らす事を実践していた英国人の作家ニールさんという方が最近亡くなりました。そのニールさんが原点



上/外国の客人を雲八幡宮に招く川眞先生と名誉宮司
下/川眞先生の旭日双光章授賞祝賀会にて雅楽の祝儀演奏をする名誉宮司・現宮司ら

にしていたのは故郷 英国ウエールズの炭鉱です。その自然破壊の凄まじさとそれに対する怒りが幼い頃から身についていたようです。木材と石炭の供給基地となり森の木が切り倒され石炭が山と積み上げられ荒れ果てた故郷を顧て本当の豊かさとはなにか、と疑問を抱いたということでした。今回のコロナの感染を顧て改めてもう一度、日本人の価値観を見つめ直すべきではないでしょうか、と述べられました。ニールさんの言いたかった事は、全ての生命は唯一無二の存在だが、お互いに結びついています。私達は今こ

そお互いの尊敬と謙虚さを学ぶ必要があるのです」という事です。

西洋的な考え方は「自然とは征服するものである」という考えの下、大きな堤防やダム、大規模な自然開発をする事が当たり前のように行われてきました。そんな考えから大自然を壊して行く中でアフリカのゴウモリやサルたちが行き場を失い人間と交流する事によってエイズやエボラ出血熱が発生し世界中に広がりました。奥地に住んでいたゴウモリが、人間が山奥を開発する事によってハクビシンやイタチ、タケネズミなどの餌となり、それを人間が食していくという循環が、今回のコロナウイルスの感染拡大に繋がっています。

神道は、山には山の神あり、海には海の神あり、という自然を大切に生きる事の重要性を子供の頃から教えてくれ、また、お祭りなどを通じて地域の人々との交流やコミュニケーション、地域のため、人のために自分達がしている事の重要性を子供の頃から自然信仰の中で教わっていたのではないかと思います。

今回のコロナが少しでも早く終息し、お祭りや自然の中を探索できるようになる事を祈っています。